

上野ムイテクンに関する写真資料—中野エミ子旧蔵資料—

Photographs of Ueno Muytekun – From the Collection of Emiko Nakano –

八幡巴絵 (YAHATA Tomoe)

国立アイヌ民族博物館 学芸主査 (Senior Fellow, National Ainu Museum)

キーワード：アイヌ、写真、生活史、上野ムイテクン

Keywords: Ainu, photographs, life history, Ueno Muytekun

1. はじめに

本稿では、筆者が入手した写真やアイヌ舞踊の教材のうち、白老の伝承者として知られる上野ムイテクン (1872-1964¹⁾) が被写体となった写真4点について紹介する (表1)。本資料は、筆者の祖母の中野エミ子旧蔵資料で、収集時にムイテクンに関しての聞き取りを行った²⁾。これらは白老地域のアイヌ観光や昭和初期

の暮らしを働き手の視点から記録されたものであり、白老地方の現代史を語る上でも貴重な資料と位置づけられよう。白老地域のアイヌ観光や昭和初期の暮らしを働き手の視点によって明らかにされることが期待できる。さらに国立アイヌ民族博物館で常設展示となる基本展示室においても、当事者性を意識したアイヌ民族視点から「白老地域で暮らすアイヌ」を紹介する展示に寄与することができると考えられる。

表1 中野エミ子旧蔵資料 (写真)

No.	撮影内容	計測値 (mm)	所蔵
写真1	上野ムイテクンと祭壇	L58×W85	筆者蔵
写真2	上野ムイテクン 私服	L90×W60	筆者蔵
写真3	上野ムイテクン チズリ着用	L115×W75	筆者蔵
写真4	集合写真 (住吉平吉、森竹竹市、野本イツ子、梅ヶ枝ツル、上野ムイテクン、氏名不詳の男性)	L75×W115	筆者蔵

2. 上野ムイテクンの写真資料について

本章では、ムイテクンのこれまでの記録と、写真資料の経緯を簡単にまとめる。

(1) 上野ムイテクンに関するこれまでの記録

ムイテクンについては、『エカシとフチ 北の島に生きたひとびとの記録』の付録である『『エカシとフチ』資料編 文献上のエカシとフチ』によると、下記の5点に記録がある(『エカシとフチ』編集委員会(編)1983:15)。さらに『ポロトコタン官報』には、人物情報が記載されている。

- ・日本放送協会1965、『アイヌ伝統音楽』。
ムイテクンが長女の野本イツ子らとともに、うたぐり歌などを歌った音声収録されている。
- ・白老民族文化伝承保存財団1982、『白老民俗資料官報白老ポロトコタン No.3』p4「伝承の担い手たち」。
ムイテクンの孫・野本亀雄からみたムイテクンの人となりについて口述した内容をまとめたもの。
- ・北海道文化財保護協会1964、『北海道の文化 No.7』p65-p81「アイヌの娘と雷姫」。
ムイテクンが1958年にアイヌ語で口述した物語を、甥・森竹イタクノトが収録し、白老高等学校の北畠良治と原文の対訳したもの。
- ・北海道文化財保護協会1976、『昭和50年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(無形文化財1)』。
「上野ムイテクン」名で、カムイユカラ(神謡)³⁾エゾオオカミの小神の自叙伝について、概要をまとめたもの。
- ・財団法人アイヌ無形文化伝承保存会1982、「カムイユカラ エゾオオカミの子神の自叙伝」『アイヌ無形民俗文化財記録第1輯 神々の物語』p13-20。
上野ムイテクンが口述したカムイユカラ エゾオオカミの子神の自叙伝の対訳。

『白老民俗資料官報白老ポロトコタン No.3』の「伝承の担い手たち」によると、ムイテクンは「白老地方の伝統を担った最大の伝承者として有名で、体格、気骨も男勝りであり、日本語も達者ながら、死ぬまで日常をアイヌ語で通し、祖先伝来

の伝統に厳格な人物であった」という。また森竹竹市⁴⁾(1902-1976)はムイテクンの甥にあたることが記されている。ムイテクンは戦後、洞爺に復元された見学用のコタンでしばらく働いたあと、ポロトコタン創設のための力になったことが紹介されている(財団法人白老民族文化伝承保存財団1982:4)。また、本名はフッチエトクで、ユーカー等の口碑伝承に特に優れていたが、手仕事にも秀でており、白老地方の着物、サラニフ(荷縄)、エムシアツ(刀掛帯)等を多く製作したことが知られている。(財団法人アイヌ無形文化伝承保存会1982:16)。

(2) 旧蔵者の経歴

旧蔵者である中野エミ子(1933-)は、白老の伝承者として知られる上野ムイテクンの孫にあたる。幼少期は白老で生家の自営業(漁業)を手伝い、結婚後の1956年からは白老市街地にあったアイヌ観光を行う2軒⁵⁾のチセ近くで、観光客へスズランやクロユリなどの花売⁶⁾を行っていた。

1965年には町内にあったチセなどの観光施設を白老町ポロト湖畔へ移転し、「白老ポロトコタン」として営業を開始したことに伴い、ポロト湖畔に新設された民芸店へ販売拠点を移した。白老ポロトコタンでは、解説員がアイヌ文化の紹介や、屋外で白老地域に伝わる古式舞踊の披露を行って、観光客の受け入れを行ってきた。

中野の仕事は、花売であったが、白老ポロトコタンの出張公演などで、舞踊担当職員が足りない際は古式舞踊の手伝いをしていた。こうした経歴から中野は昭和20年代以降の白老アイヌの観光や従事する職員に関する写真資料を数多く有し、さらにその被写体となった人物たちについて詳しい。

中野の生家となる上野家では、中野の姉・山田ミツエと花売をし、春になれば父・四郎が出稼ぎ漁へ朝里(あさり、現・小樽市)や白谷(うすや、現・留萌郡小平町)へ赴く際に中野が同行し、夏まで働いて、秋から冬は白老の前浜で働くなど日々労働し、嫁ぎ先では配偶者・中野清美(1932-1974)と42歳のときに死別したことから、70歳になるまで日々働いていた。そのなかで中野は「自分はアイヌの血を引いているけれど、日々食べるのに必死で働いてきたから、ハボ(付記:アイヌ語で「母」の意⁷⁾だが、上野家ではムイテクンのことをいう)や両親から民族のことは教わってこなかったから何も知らない。時代が変わって孫(付記:

ここでいう孫は筆者のこと)がこのようにアイヌのことをやるようになったから、着物の一枚でも縫ってやりたい」との思いから、山崎シマ子が主宰する刺繍サークル「テケカラベ」に所属して、ルウンペ(木綿衣)の製作を習得した。

このため、筆者は財団法人アイヌ民族博物館⁸⁾の学芸員となった2012年以降、中野やその姉・山田ミツエらを中心とした親族に、白老ポロトコタンや白老地域のアイヌの漁業に関する聞き取り調査を行ってきた。

3. 写真資料に関する聞き取り調査

旧蔵者である中野エミ子に対し、2012年から2024年11月末までに行ったムイテクンに関する聞き取りから写真について次のような情報を得た。

写真1は、祭壇を背景に写る上野ムイテクンで、白老地域の代表的な木綿衣であるルウンペを着用している。中野によるとこの祭壇は上野家にあったもので、中野の父、上野四郎(1903-1981)がイヨマンテ(クマの霊送り)を行っていたときに使用したものだという。聞き取りでは、「昔、実家の裏にヌサ(祭壇)があった。その近くに行くと、父さん(付記：上野四郎)がともなく怒るので、子供たちに近寄せなかった。ヌサには、父さんとハボだけ行って、母さん(付記：上野ツギ)は行かなかった。父さんは周りから頼まれてイヨマンテに何回か行っていた。この祭壇は四郎が亡くなった1981年には既になくなっていった」との話を得ている。大きい祭壇の横に、先祖供養用の小さい祭壇があり、新しいイナウ(木幣)がつけられていることから、何らかの儀式が上野家であった際、記念に撮影されたものと推測される。なお、中野によると、上野の家屋はムイテクンと四郎の存命中となる1945年以降に建て替えが行われたことがあるという。上記の情



写真1 上野ムイテクンと祭壇



写真2 上野ムイテクン 私服

報から撮影時期は1945年から、ムイテクンの亡くなる1964年までに撮影されたと考えられる。

写真2は、私服姿の上野ムイテクンである。ムイテクンは、貝澤藤蔵(ウサシカン)⁹⁾(1888-1966)の観光チセにて働く際、切抜を多用した模様を施したルウンペを着用していた。しかし普段着では、和服またはブラウスなどの薄手のシャツの上に和服を着用していたという。観光写真や親族の記念写真で、普段着のムイテクンは映り込んでいないため、本資料はムイテクンの伝承者としての姿とは別の「普段の暮らし」を描写しており、戦後の生活史を物語る資料として貴重である。またムイテクンは、ショートボブで髪を短く切り揃えていたため、手ぬぐいやタオルなどをつかって髪の毛をまとめていたという。

中野によると、上野家では漁業を営むのと同時に、自宅敷地内では養豚、養鶏、畑作を行っており、ジャガイモ、カボチャ、ナガネギ、トウモロコシ、ササゲ、アズキなどを栽培し、自家消費していたという。写真は干したマメの外皮をとる作業中に撮影されたものと考えられる。現在この写真は、国立アイヌ民族博物館基本展示室内の探究展示「テンパテンパ」のグラフィックにて使用されている。なお撮影時期については不明である。またこの時に、筆者がムイテクンの配偶者について尋ねたところ「昔、ハボから聞いたことがあるが、シシンランケ(しねんらんけ)という人で、早い時期に亡くなったと聞いた。ハボは自分の若い頃の話をしたことはなかった」という。



写真3 チヂリを着用した上野ムイテクン

写真3は、チヂリを着用した上野ムイテクンである。写真1では、白老地域で伝統的に着用されるルウンベ姿のムイテクンを紹介した。これに対してこの写真ではムイテクンがチヂリを着用していることに注目したい。ムイテクンの関係者でチヂリを製作できたのは、親族となる住吉平吉(1900-1982)の妻ときである。ときの長女の林洋子(1942-)によると、「母のときは手先が器用で、平吉のルウンベやチヂリ、陣羽織などの装身具も一式作っていた。それを父親は着て貝澤さんのチセで働いていた。同じ模様のものは貸衣装にしたこともあった」という¹⁰⁾。「貝澤さんのチセ」というのは、前述の貝澤藤蔵の観光チセである。貝澤のチセ

では、働き手は衣装となるルウンベや装身具を自前で準備する「自分賄い」だったことが知られている。また住吉平吉、とき、洋子がかつて室蘭に居住していて、白老に引っ越したが、その際に短期間上野家に同居していたことがわかっている。このことからこの写真で着用したチヂリは、住吉から借用していた可能性が高い。なおこのチヂリの所在は現在不明である。

写真4は、集合写真である。ここには、左上から住吉平吉、森竹竹市、左下から野本イツ子(1892-1978)、梅ヶ枝ツル(1897-1971)、上野ムイテクン、氏名不詳の男性が写っている。ムイテクンが同じ背景、チヂリを着用していることから、写真3と同じタイミングで撮影されていると考えられる。写真に写っている人物らとともに撮影された写真は他にも見られ、これまで貝澤藤蔵の観光チセや昭和新山アイヌ記念館などで撮影されたものが確認されている。中野によると、ここに写っている人物たちは、いずれもムイテクンの親類であり、仕事仲間でもあるという。さらに森竹竹市とムイテクンの長女の野本イツ子とともに撮影された写真は他にもあるという。氏名不詳の男性については、今後の調査で明らかにしたい。

4. まとめ

写真とそれを基にした聞き取り調査の結果については次のようになる。

- ・ムイテクンの若い頃について、従事していた仕事や、夫・シ子ランケに関する詳細な情報は不明である。



写真4 集合写真(上の段左から住吉平吉、森竹竹市、下の段左から野本イツ子、梅ヶ枝ツル、上野ムイテクン、氏名不詳の男性)

老年期は貝澤藤蔵の観光チセにて働いていた。その仲間は、森竹竹市、住吉平吉、梅ヶ枝ツル、野本イツ子らであり、みな親族であった。

- ・上野家では代々漁業を行い、自宅敷地内にて養鶏や畑作を行っていた。敷地内で栽培していた作物は、ジャガイモ、カボチャ、ナガネギ、トウモロコシ、ササゲ、アズキなどである。
- ・上野家ではアイヌ民族の伝統的な祭壇があり、先祖供養用の祭壇も確認できた。ただし祭壇は四郎が管理しており、四郎が死去した1981年にはすでに存在

していなかった。このため、四郎の生前に祭壇を解体した可能性がある。

- ・ムイテクンはルウンペを製作し着用していたが、写真ではチヂリを着用しているものも存在する。なお普段着は、和服またはワンピースなどの薄手のものの上に和服を着用し、作業時には手ぬぐいやタオルを巻いていた。

また、家系図については、下記の通りとなる(図1)。

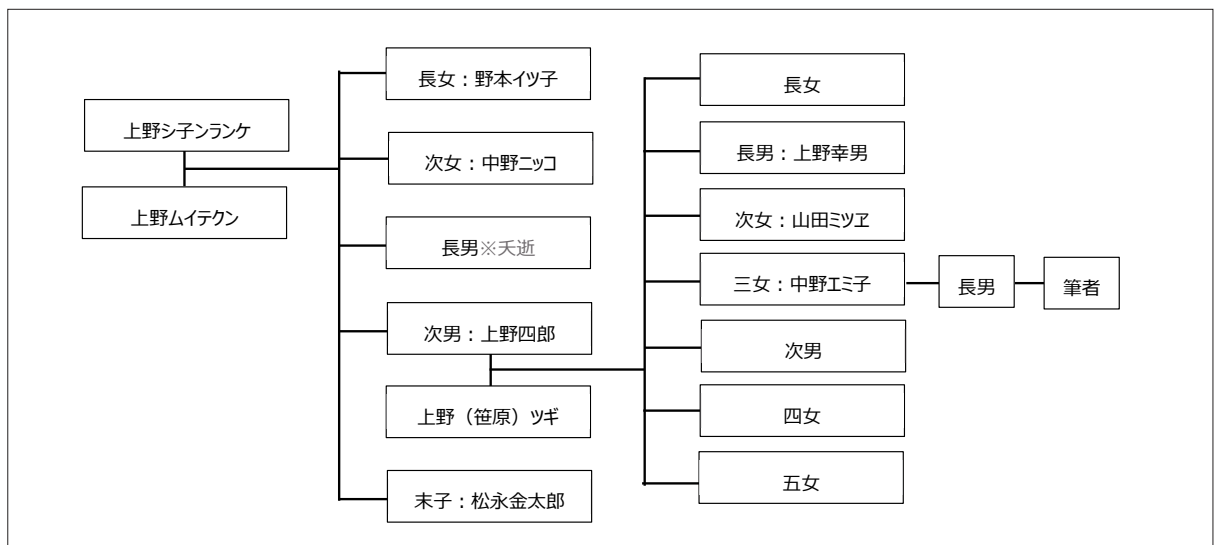


図1 上野家の家系図 筆者が聞き取り調査をもとに作成

これまでの上野ムイテクンの記録とあわせて、直系遺族の聞き取りから、ムイテクンの生活史に関する記録が追加された。

中野エミ子旧蔵の写真は、中野の生家となる上野家の人物、特に上野ムイテクンを起点にしたものと、旧白老市街地、1965年以降の白老ポロトコタンの様子、2001年までのポロトコタンの様子や勤務した人物を写したものである。これらの写真は、現在まで続く白老地域の歴史や文化を語ることができる、アイヌ民族の視点からの記録として位置づけられる。また、働き手の視点から同地域のアイヌ観光や昭和初期の暮らしを明らかにすることができると考えられる。国立アイヌ民族博物館で常設展示となる基本展示室では、アイヌ民族視点の展示を行っているため、「白老地域で暮らすアイヌ」の視点が現代史の展示に寄与することができると考えられる。このような個人の事例を蓄積していくことで、アイヌ民族の地域の「現代性」を表すことが可能となるであろう。引き続き上野家、中野家の事例を集め、白老地域のアイヌ民族の現代史を明らか

にすべく、調査を行いたい。

謝辞

本稿と作成するにあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。親類のみなさまには聞き取り調査にて多くのことを学ばせていただきました。

元・苫小牧駒澤大学教授の岡田路明氏、文化庁企画調整課調査官の内田祐一氏、北海道博物館学芸主査の大坂拓氏、国立アイヌ民族博物館の鈴木建治氏より多大なご助言、ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 戸籍上の名前は「フツエトク」であることが除籍謄本からわかっている。出生年は1872年となっているが、2012年の聞き取り調査で中野エミ子、山田ミツエが「生まれてから何年か後に届出を行ったため、実年齢は戸籍に記述されているよりも数歳年上となるはずだ」と語っている。
- 2) 本稿では、集合写真に被写体となった人物名について、遺族の承諾を得たもののみ記載した。
- 3) カムイユカラは、アイヌの口承文芸のうち、神謡と呼ばれるジャンル

- で神が自らのことを語る話である。サケヘという繰り返し言葉がついている(萱野2002:200)。
- 4) アイヌ民族の三大歌人のひとりである森竹竹市(1902-1976)は、21歳で国鉄に入ってから13年奉職し、その後は自営業(漁業ののち食堂経営)を経て、1961年に昭和南山アイヌ記念館長、1965年にポロトコタン解説員を勤め、1967年にはポロトコタンの中に設立された白老民俗資料館の初代館長を3年間勤めた。
- 5) 宮本イカシマトク、貝澤藤蔵(ウサシカン)の観光チセである。
- 6) 花売は個人として行っていたという。組合がいつ設立したかははっきりとわかっていない。中野の開き取りからは、戦後には既にスズランなどを売る個人が集まり組合を組織していたことがわかっている。花売組合は旧白老市街地の観光チセ周辺で販売をしていたが、1965年のポロト湖畔への移転に伴い事業所を移動した。白老町史によると1973年までは花売組合以外の業者もあり、任意組合として活動していたが、土産業界の状況などの理由から組合の法人が望まれ、白老観光商業組合(略称:観光商協)が1973年4月1日に設立されたこととある(白老町町史編さん委員会1992:65)。花売組合は、戦後13人で組織し、2000年以降は、中野ともう1名で組合を存続していたが、中野が離職した2007年頃に存続が困難として休止した後には解散した。
- 7) ハボは、アイヌ語で母という意(白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室2012:139)。アイヌ語白老方言では、半濁音が濁音になる傾向がみられる(例:ハボ→ハボ)。上野家では、ハボというとムイテクンのことを指していた。他家からは「上野のハボ」とも呼ばれていた。
- 8) 1965年に白老市街にあったアイヌ観光の機能を移転し、「ポロトコタン」として営業を開始した。1967年、ポロトコタン敷地内に白老民俗資料館が開館した(白老町1975)。収蔵資料点数の増加に伴い、施設が狭あいとなったことから、新しく博物館を建設することとなった。1984年、白老民俗資料館の建物とつなげたアイヌ民族博物館が開館した。ポロトコタンは、アイヌ民族博物館のみ指す言葉ととらえられがちであるが、その周辺にあった商業施設「ミンタラ」も含まれることに留意したい。このアイヌ民族博物館は、2018年3月末日をもって閉館したが、同地には民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)の設立準備期間を経て、2020年7月12日に民族共生象徴空間の開園と同日に、国立アイヌ民族博物館が開館した。運営は公益財団法人アイヌ民族文化財団が行っている。詳細は、https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/details/post_1.htmlを参照いただきたい。
- 9) 貝澤藤蔵は、北海道平取町二風谷出身で、青年期は平取村役場に勤務し、アイヌ書道家として、書を通じてアイヌ青少年の指導に尽くした(荒井1992:140)。老年期には、妻コーヨとともに白老において来館者を受け入れる観光チセをつくり、ウサシカンというアイヌ語名でアイヌ文化の解説にあたった(田辺1984:37-42、財団法人アイヌ民族博物館1988)。
- 10) 2024年2月の聞き取り調査にて。

参考文献

- 荒井源次郎
1992『荒井源次郎遺稿アイヌ人物伝』p140、札幌市(北海道):加藤好男。
- 『エカシとフチ』編集委員会(編)
1983『『エカシとフチ』資料編 文献上のエカシとフチ』『エカシとフチ 北の島に生きたひとびとの記録』札幌市(北海道):札幌テレビ放送株式会社。
- 萱野茂
2002『萱野茂のアイヌ語辞典 増補版』p200、東京:株式会社三省堂。
- 財団法人アイヌ民族博物館
1988『『シラオイコタン』木下清蔵遺作写真集』白老町(北海道):白老民俗文化伝承保存財団。
- 財団法人白老民族文化伝承保存財団
1982『白老ポロトコタン—白老民俗資料館報— No.3』白老町(北海道):財団法人白老民族文化伝承保存財団
- 白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室
2012『アイヌ語白老方言辞典』p139、白老町(北海道):白老楽しく・やさしいアイヌ語教室。

- 白老町
1975『白老町史』白老町(北海道):白老町役場。
- 白老町史編さん委員会(編)
1992『新白老町史 上巻』p65、白老町(北海道):白老町役場。
- 田辺忍
1984『白老今昔物語』白老:田辺真正堂。